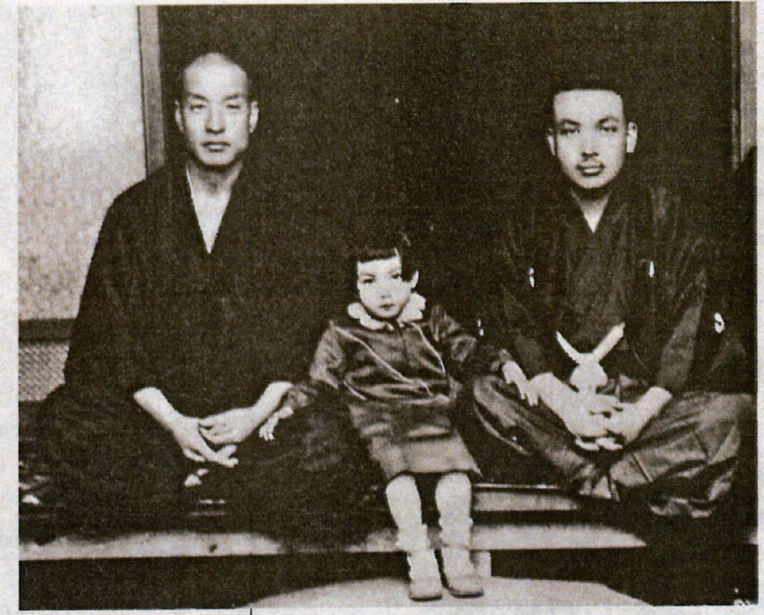


おわら名歌 生んだ恩人



川崎順二(右)と一緒に写真に納まる小杉放庵(左) 昭和初期

小杉放庵 没後50年

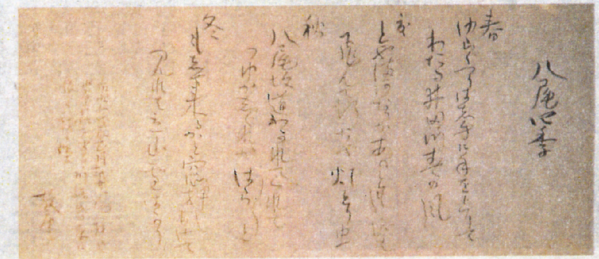
大正期から昭和初期にかけて、おわらは大きな変革期を迎えた。独特の歌い方が生まれ、新しい踊りが誕生した。そのころの勢いがおわらの格調を高め、多くの人を魅了する芸に押し上げた。

その中でも、洗練された歌詞「八尾四季」を詠み、こととして没後50年を迎えた栃木県出身の文人画家、小杉放庵(1881~1964年)の功績はひととき目を引く。おわらにとって、放庵は恩人の一人といえるだろう。

なぜ放庵は八尾を訪れ、現在まで歌い継がれる名歌を詠んだのか。その名歌は、どのようにおわらを変えたのか。放庵とおわらの関係をひもとく。

た後に「ただ、歌詞が…」と口ごもった。歌詞に幻滅した様子の放庵に、順二はこう頼み込んだ。「先生、それでは唄をひとつ作ってはくれないか」。その要請に応え、放庵が詠んだのが、八尾の春夏秋冬をそれぞれ表現した名歌「八尾四季」だった。芸術家として世に名の知れた放庵の心を動かすほどの美しさや奥深さが、まだ洗練されていなかったおわらの中に、キラリと光っていたのだろう。

八尾四季の発表以降、格調高いおわらの秀歌が続々と現れるようになる。順二が招いた文人墨客はもちろん、文芸好きの町の若者までもが、競うように唄を詠み始めた。放庵の名歌は、おわらの様相をがらりと変えた。



小杉放庵直筆の「八尾四季」。春夏秋冬の4番がしたためられている

優れた風景たたえる

八尾四季の誕生から2年後の1930年10月、川崎順二は「おわら総寄せ」を行った。八尾の町を見渡せる城ヶ山(富山市八尾町諏訪町)に演じ手を集め、おわらを披露する大規模な催しだった。この催しへの招待に感激した放庵は、八尾の優れた風景を八つ選び、新たなおわらの歌詞を作った。それが「八尾八景」だ。八つの風景を選んでたたえ

「八尾八景」

る文化は、10世紀に北宋(現在の中国)で誕生した画題「瀟湘八景がルーツという。放庵の八尾八景もこの瀟湘八景に詠まれた「雪書」や「秋月」などの事象を踏襲しており、美しさが際立っている。放庵は、催しを見物した感想をこの歌詞に添えて後世に伝えている。「近年風流の如きもの少し」。放庵がおわらを受愛し、ほれ込んでいたことをありありと示している。



八尾の芸者衆や川崎順二(前列左から4人目)らと一緒に写真に納まる若柳吉三郎(同7人目) 昭和初期

四季の踊り誕生

新しい所作 格調高く

放庵の詠んだ「八尾四季」は、秀歌の創作を促しただけでなく、優美な踊りが誕生するきっかけにもなった。八尾四季が詠まれた翌年、おわらは東京三越の富山県物産展への出演が決まった。あ

か抜けた新しい踊りを披露しよう」というおわらの演じ手たちの機運を感じ取った放庵は、東京を拠点に活動し新進気鋭の舞踊家として注目されていた若柳吉三郎との間を取り持った。吉三郎は、八尾四季を基に春夏秋冬にそれぞれ異なった所作がある「四季の踊り(女踊り)」を振り付けた。そのあでやかな踊りは、物産展を訪れた大勢の人を魅了し、おわらの芸能としての格をさらに高めた。心情や風景を美しく詠み込んだ唄と洗練された踊りは、現在のおわらに通じている。おわらの格調の高さは、放庵と八尾四季を抜きにしては語れない。

「交流」受け継ぐ

放庵の没後50年を記念し、県民謡越中八尾おわら保存会(福島順二会長)のメンバーが、ことし8月に初めて、栃木県日光市にある放庵の墓前で「八尾四季」を歌って奉納した。おわら保存会は、放庵を顕彰する日光市の民間団体「小杉放庵研究会」と交流を深めている。研究会のメンバーは毎年、八尾を訪れおわらを鑑賞している。当初は、保存会のメンバーが放庵の墓前でおわら演じる予定だったが雨で中止。墓参中、晴れ間が出たため八尾四季を歌うことができた。川崎順二と放庵の親交は、半世紀たった今でも保存会と研究会という二つの団体の交流に形を変え、しっかりと受け継がれている。

越中八尾おわら保存会



小杉放庵の墓前で「八尾四季」を歌って奉納する県民謡越中八尾おわら保存会のメンバー(8月) 栃木県日光市

春夏秋冬 美しく表現

「八尾四季」

「いい曲だ、伴奏も素晴らしい。ただ」 1928年1月。富山市八尾町東町の開業医、川崎順二(1898~1971年)は、書画や古美術品好きが高じて放庵を八尾に招いた。放庵が富山市内に滞在していることを出入りの表具師から聞き、宴席を設けたという。

席の余興に、順二は歌い手と地方衆だけのおわら披露した。座を盛り上げる歌い手の、男女の思いをあげすけに詠んだ唄に、放庵は演奏をほめ

おわら変革期の歩み

- 1906年 婦負郡役所(当時)の公文書に初めて「風の盆」という言葉が登場する
- 11年 北陸タイムス千号記念祝賀会で芸者衆が即興でおわら踊りを披露
- 13年 北陸線の延伸を祝う行事でおわらが披露される
- 20年 おわらの改良を目的に「おわら節研究会」が設立される。「豊年踊り」誕生
- 21年 第1回全国民謡大会でおわらが披露される
- 22年 第2回全国民謡大会でおわらが日本一になる
- 歌い手、江尻豊治が上の句と下の句を一緒に歌い切る「江尻調」の歌唱法を確立
- 28年 小杉放庵が「八尾四季」を詠む
- 29年 舞踊家、若柳吉三郎が「四季の踊り(女踊り)」と「かかし踊り(男踊り)」を振り付ける
- 東京三越の富山県物産展で「四季の踊り」を披露
- 「越中八尾民謡おわら保存会」が発足、川崎順二が会長に就任
- 30年 川崎順二が城ヶ山で「おわら総寄せ」を開催
- 小杉放庵が「八尾八景」を詠む
- 31年 音楽家の高階哲夫(滑川市出身)がおわらの唄を採譜
- 45年 戦争の影響でおわら風の盆中止
- 64年 小杉放庵が82歳で死去
- 71年 川崎順二が73歳で死去